

「活用 (output)」力を高める英語の授業

立川 研一

(大分県玖珠郡九重町立野上中学校)

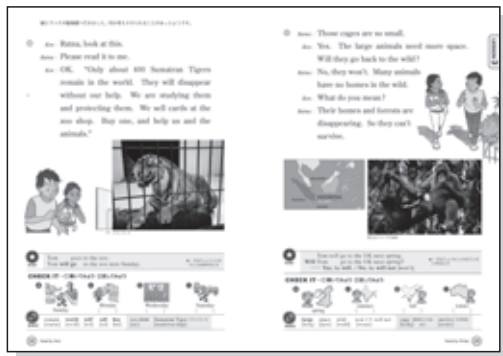
1. はじめに

新学習指導要領のキーワードともなっている「習得」と「活用」とは、端的に言えば input 活動と output 活動のことだと言える。また、input した学習項目を、「使いこなせる状態 (intake)」にまで高める活動、つまり「習熟」のための活動が、2つの間をつなぐ大切な学習活動となる。

学習者に英語によるコミュニケーション能力を身につけさせるためには、この「習得 (input) ~ 習熟 (intake) ~ 活用 (output)」の3つの段階を、授業の中に計画的に、しっかりと仕組んでいく必要がある。また新学習指導要領の趣旨をふまえ、「読む」「聞く」「話す」「書く」の4つの技能を育てる活動をバランスよく授業に取り入れていくことが今後ますます求められる。

2. 「活用 (output)」力を高める授業設計

input-intake-output を意識し、4技能をバランスよく取り入れた授業とはどのようなものであろうか。以下に、NEW CROWN English Series 2 Lesson 3 を題材に、筆者が行った授業の実践例を示す。



本課では、動物園に保護されている絶滅危惧種の動物や環境破壊の問題などが扱われており、その中で助動詞 will を使った未来形の文や、接続詞 when の用法を学習するように構成されている。教科書本文には、消滅しつつある森林、動物園の中で生き残っているスマトラ虎の現状が語られており、挿絵には、今のところ自然の中に住んでいるが徐々に森林が失われ、住処を追われつつあるオランウータンの親子などが取り上げられている。

内容的に非常に考えさせられるものではあるが、読解しただけではなかなかすぐに output 活動にはつながりにくい内容でもある。そこで、この課の学習の最後に、“Are the animals in the zoo happy or unhappy?” という疑問に答える「意見文」を書かせ、口頭でそれを発表させるという活動に取り組みさせようと考えた。そして、それに向けて input 活動や習熟活動を仕組むことにした。

3. output 活動に向かう input 活動

授業ではまず、機械的なドリルやパターンプラクティスを通して、助動詞 will の理解と習得 (input) を図った。さらに「たれば連想ゲーム」(『Talk and Talk』, 田尻悟郎著, 正進社) に取り組ませることでその習熟をねらった。

「たれば連想ゲーム」とは、1人目の書いた文の主節を次の文の従属節とし、しりとり的な要領で文をつないでいくゲームである。

例) If I go to America, I will go to New York.
→ If I go to New York, I will watch baseball games.
→ If I watch baseball games,

4人班でいくつ文をつなぐことができるか競わせた

り、班で協力して4つめの文にオチをつけさせたりするなど、様々な形で取り組ませた。

この活動を通して、学習者は will を使った文を作ったり、それを現在形にもどしたりするなどの操作を楽しみながら体験することができると共に、自分の考えたことを英語で表現する楽しみや自己有能感も味わうこともできる。そして何よりこの活動の本当のねらいは、後の output 活動の中に活かしていくことができる点にある。「もしも～ならば、…であろう」という文型は、「もしも森林がなくなれば…」などといった形で意見文に用いやすい。ゲーム感覚で何度も口にした文型を、後に自己表現の手段として役立てることができるという点で、この活動は非常に重要な習熟活動なのである。

自分の意見を書く活動では、初め各自で意見を書かせた後、4人班でそれぞれの意見を持ち寄せ、互いに吟味させあいながら、最終的に group opinion という形にまとめさせた。さらに ALT の前でその意見を口頭発表させ、ALT からの質問に答えるという活動へとつなげていった。以下に生徒の作った意見文をいくつか示す。

- We think Orangutan and Sumatran tiger are not happy, because their homes and forests are disappearing. So they can't survive. And cages are so small. If their homes and forests come back, they will be happy.
- I think Sumatran Tigers are happy. Now their homes and forests are disappearing. If they live in the wild, they won't survive!!!!
- We think Sumatran Tigers are not happy, because Sumatran Tigers can't run in the cage. But if Sumatran Tigers live in the forests, Sumatran Tigers will disappear. If people don't kill forests, forests won't disappear. If forests don't disappear, they can go back to forests. Then they will be happy.
- We think that Sumatran tigers aren't happy. Because they don't have freedom. But we think that they are happy too. Because we are helping them. They can't survive in the wild without our help.

「たれば連想ゲーム」で学んだ文型に教科書本文の表現をあてはめたり(下線部)、教科書とほぼ同じ文であるが、独自の文脈の中で使用することで自分の言葉としたりしている例が多く見られる。学習活動の中で input された項目や教科書の本文などが intake され、学習者自身の言葉として活用(output)する力が育ったのではないだろうか。

また、この学習を終えた後の生徒の感想文には、「自然の中で暮らす動物も大変なんだなあということを実感した」「自然を守るために、今自分ができることも考えていかなければならないと思った」などの記述が多く見られた。英語を使って output しようとする活動を通し、結果的に生徒は何度も教科書本文に立ち返ることとなり、自然に本文内容の読解も深まったのではないかと考えている。

なおこの次の単元(不定詞)では、“行きたい国とその理由”を自己表現する output 活動、「夏休み夢の旅行」に取り組ませた。出来上がった作文の中には、不定詞の3用法はもちろんであるが、if 節を伴った未来形の文章も多数用いられていた。1度 output 活動を通して身につけた表現は、生徒の中に確実に定着していることがうかがえた。

4. おわりに(教師に求められること)

1つ(または複数)の単元を通し、その最後にどのような output 活動ができるような力を生徒につけたいのか、明確な目標意識を持つことがこれまで以上に強く教師に求められると考えている。またそれに向けて、反復的、戦略的かつ魅力的に授業を組み立てていく「授業デザイン力」がますます重要になっていくであろう。

そのためにも、単元やレッスン、教科書本文などが、どのような output 活動ができるように構成されているのか、教材の価値を見抜く眼力や、教材と教材を組み合わせより効果的な学習活動を仕組んでいくなどを一層高めていきたいと考えている。教師もまた学び続けることで、生徒とともに成長し続けたいものである。

【参考文献】

大分大学教育福祉科学部附属中学校研究紀要第54集。
田尻悟郎(2000)。「Talk and Talk Book 2」。正進社。